

宇宙人の証明

作…井上夢人 上演台本…永妻晃

A 京子

B 美穂

Bits
1

A どうしたの会社無断欠勤して、携帯も繋がらないから、心配して来てみたのよ。

B ごめんなさい。実はね、大変な事態なの……。

A 何が起きたの？

B 私のいうこと信じる。

A いきなり。

B ねえ、信じる。

A 信じるよ。だから何なの？

B 秘密も守れる。

A 何があつたの？

B 誓って！

A 誓うって、大げさね？

B 誓って！！

A はいはい、誓いますよ。今日の昼食べた天井に誓って……。

B ふざけるなら、言わない！

A ごめん。はい、誓います。美穂ちゃんの言う事は必ず信じます。で……。

B 私ね、宇宙人見つけたの。

A あーに？

B 聞こえなかった。

A 確か宇宙人って？

B そう。まだ誰にも秘密だからね。

A 宇宙人に遭ったわけ。

B て、言うか、助けたの、私が……。

A 宇宙人を助けたの？

B ええ。

A まあ、よくある話だわね。

B 信じてないんでしょう。

A 信じてるわよ、あたしもね昔、雨の日よ。八手の葉の下でミミズがジャンケンしてるの見た事があるもん。

B 帰って！

A 分かったわよ。冗談言ってごめんなさい。お話下さい。

B (Aを睨む)

A ごめん、信じます…で、何であんたが宇宙人助けたの？

B 頼まれたんだものよ、『助けて』って。

A 頼まれた？ 誰に？

B だから宇宙人によ。

A 何て？

B 『助けて』って。

A 宇宙人が美穂ちゃんに『助けて』って言ったの？

B そうだよ。

A 何処で？

B ……氷川様。

Bits 2

A 氷川神社。

B そう。

A 宇宙人がお参りに来てたの？

B 違うよ、バカだな！

A 今、何て言った!!

B バカって言ったのよ！

A それで？

B ? 一昨日おととい雷が落ちたのよ。

A 何処へ？

B 夕立も凄かったの。

A だから雷が何処へ落ちたの？

B 氷川様。

A 氷川神社。

B そう。

A すぐそばじゃない。

B そうビックリしちゃった。バチン！ っって凄い音がしたの。

A (迫力無く) ポチンって。

B ポチンじゃないわよ。バチン！ よ。

A (大迫力で) バチーン！

B でき、窓の外が真っ白になって、雨が止まって見えたの。ストップモーションみたいに、きれいだったんだから。

A 雨、止まるかな。

B 感覚よ！ もっと芸術的な思考をお持ちなさいよ。
A ゴツホ、ゴーギャン、ピカソ！
B 京子さん、何か拾って食べた。
A で。

Bits 3

B でね、次の日よ、だから昨日ね。昨日、神社に行ってみたのよ。そしたら、みんながね『銀杏いちじょうの木に雷は落ちた』って言ってるから。銀杏の木を見に言ったのよ。そこで見つけたの。

A 宇宙人を……。

B 凄いでしょ。

A ……ちよつとよく話が見えないんだけど。

B 何が見えないのよ？

A もう少し詳しく話してよ。

B だから、氷川様の銀杏の木、知ってるでしょ。

A あの高い木。

B そう、あれがね黒焦げになってるのよ。木の真ん中に縦にザツて穴があいちやって、半分地面に倒れてるの……消防車が来てたみたい、黄色いテープで木の周りをグルって囲ってあってね。みんなが近づけないようにしてんのよ。私その他にもいっぱい人が来ててね。ちよつとした事件だったわよ、ここらの。

A それで？

B 木の周りをグルと回って見てみたのよ。そしたら、『助けて』って誰かの声が聞こえたのよ。それが変な感じなのよ。言葉でね『助けて』って言われた感じじゃないの。何て言うか……。

A 言葉じゃない？

B 誰かが私に助けを求めているって感じがね。背中がスーって寒いよ。ザワザワと言うか。

A 風邪引いたんじゃないの？

B へっ、自慢じゃないけどね、風邪なんかここ四、五十年引いたことないのよ。

Bits 4

A 四、五十年で、あんた本当は幾つなの？

B 二十歳よ。

A 話がゴチャゴチャね。あんたの話はいつも、むく犬のおケツに蚤が入ったみたいだね。

B 何それ？

A 何だか訳が解らないてーの。

B その時、あたしも何が何だかよく解らなくってね、周りを見回したら、また、『助けて』って。

A 言葉じゃない、そのザワザワ、スーが？

B そう、気味悪いでしょ。でも逃げる訳にもいかない気がして……その感じの強い方に歩いて行ったのよ。そしたら、地面に倒れている幹に居たのよ。

A 何が居たの？

B だから、宇宙人。凄いと思わない。

A あのさ。見物人が沢山いたんだろ。

B そうよ。

A 他の連中は気がつかなかったの？

B うん、あたしだけ。

A どうして、だって、倒れた銀杏の木に宇宙人が下敷きになって居たんだろ？

B 下敷きになってたなんて言っていないじゃない。勝手に脚色しないでよ。

A だって、『助けて』って。

B そうよ、木の幹にしがみついて私に助けを求めていたわけ。

Bits
5

A どうして他の人は気がつかなかったの？

B 知らないわよ。多分ね、私を選んだのよ。

A 選んだ？

B うん。だって声が聞こえたわけじゃないのよ……あれはね、要するにテレパシーよ。私にね、必死で助けを求めていたのよ。

A テレパシーで？

B そう。

A あんたを選んで？

B そう。

A 何であんたなのよ？

B つまり、私が好みのタイプだったんじゃないの？

A 何だい、男かいその宇宙人？

B 男とか女とかあるのかな？

A そして助けた？

B うん、拾って来たの。

A 拾って来た!?

B そうだよ。

A ちよつと待ってよ、『拾って来た』ってどういう事?

B どうもこうもないでしょ。拾ったのは拾ったのよ。

A 宇宙人で拾えるような物なの?

B ビックリしたのよ、私も……あんなにチツチャイとは思わなかった。

A チツチャイの?

B うん。(指で三センチぐらいな大きさを示す)このくらい……木の幹にしがみ付いてたのを手に乗つけて持って帰って来たの。

A 持って帰った!?

B そうよ。

A ここに!?

B 他に持って帰るところある? 京子さんの部屋じゃ地球の印象悪くするしね。

Bits
6

A、恐れるように部屋を見渡す。

B なに?

A この部屋に居るの?

B 居るわよ……見たい?

A (頷く)

B じゃ、持って来る。入れ物がね解らないでしょ。だから一応小鉢に入れといたの(と、部屋から出て行く)。

A 小鉢? それどういう意味? 本当にあの子、むく犬のオケツの入った蚤だわ。

B、小鉢を手に現れる。

A それどういう物?

B 見たら解るわよ。これ……。

A、こわごわ小鉢の中をのぞくき、笑いだす。

B 何よ?

A これ?

B そうよ、何で笑うのよ?

A あんたさ、いい加減にしなさいよ!

B どういう意味だよ?

A 解ったわよ。お見事でした。拍手拍手。

A、手を叩く。

B 帰れ！

A あ？

B 帰って！

A 何言ってるのよ？

B 信じてないじゃない。全然信じてないでしょ。あたしの言う事信じてさっき約束したのに。なに、拍手拍手で済ますわけ。やっぱり話すんじゃないかった。

A ちよつとツ。

B もう、京子さんとは絶交だよ！

Bits
7

A ちよつと待ってよ。私にいったいどうしろって言うの？ 私にこれが宇宙人だと言って欲しいわけ……だって、あんたさ……これ、どう見たって、ナメクジだよ。

B、ふくれて小鉢を手に、椅子に座り込み黙り込む。

A、暫くBを見つめていたが、

A ねえ、いつまでふくれているのよ？ もう、勘弁してよ。あんたね、時々地球の裏側に行っちゃうのよね。

B どうせ、私は、地球の裏側に居る、むく犬のおケツに入り込んだ蚤ですよ。

A いいからさ、もう冗談はよそう。

B 冗談何て言っていない！ 京子さんなら信じてくれると思ってたのに、やっぱり無理だったのよ。誰かに相談したかったんだけど、相談する人がいかなかったのよ。京子さんを相談相手に選んだのが私の間違いだった。

A あのさ……。

B 信じた私がバカだったのよ。

A あのさ！

B 何よ！

A マジで言ってるの？

B そうだよ。

A あんたさ、そのナメクジの為に会社休んだの？

B ナメクジじゃない！

A 神社で拾って来たナ……。

B ナメクジじゃないって言うてるでしょう！

A ……宇宙人？

B 信じないならいい！

Bits
8

A もう一回聞くけど、冗談じゃないんだよね。

B 耳鼻科行きなよ。鼓膜が破けてるんじゃないの？

A 私も真面目の話しているのよ。本当にそれ宇宙人だと思ってるの？

B だから、思っているじゃないの、これが事実なの！

A だって、無理だと思わない小鉢に入れたナメクジ見せられてさ、いきなり宇宙人て言われたら、誰だって冗談だって思うでしょう。それが普通じゃないの……違うの？

B 冗談何て言っていない。あたしね、コペルニクスの気持ちちがようやく解った。

A コペルニクス？

B 彼がね、地動説を唱えた時に誰も信じてくれなかった。

A 地動説。

B 昔わね、宇宙の真ん中に地球があって太陽は地球の周りを回ってるってみんなが信じてたのよ。それをね……。

A いやいやいや、地動説ぐらい知ってるわよ。ちょっとそれ見てみなよ……どう見たって、ナメクジじゃない。

B (じつと小鉢の中身を覗き) 似てるわ。

A 似てるわって、その物だろ！

B じゃ、聞きますけど京子さんテレパシー使うナメクジ見た事ある？

A それはないけどさ？

Bits
9

B これはナメクジに似ているけどナメクジじゃないの！

A こう言っちゃなんだけど、私はこいつからテレパシー何て何も感じないわよ。

B だって、京子さんは選ばれた人間じゃないもん。

A ああ、成程ね。他の銀杏を見物に来てた連中も選んで貰えなかったんだよね。

B そうよ。

A 美穂ちゃんだけが選ばれた。

B 今んところはね。

A それで、そいつはあんたに助けられて、小鉢に入っている。

B そうよ。

A テレパシーは？

B まだ続いでるよ。今だってゾクゾクしてるもん。
A それは風邪でしょう。その、四、五十年目に引いた。
B 私は風邪なんか引かないわよ！ ほら今もね、『助けて、助けて』しきりに言い続けているの。

A 『助けて、助けて』って……今もいつてるの？

B そうよ。

A だって、あんたはそいつを助けたんでしょ。拾って帰って来たんだから、もう助かってんでしょ。それでもまだ『助けて』って言ってるのはどう言う訳よ。

B だから、それがよく解らないのよ。昨日からずっと考えてるんだけどさ。この人がいったい何を訴えてるのかわかって？

A この人？

Bits
10

B うん、一つ思ったのは……この人の居た星が何かの危機に瀕ひんしていて、そして助けを求める為に地球にやって来たんじゃないかって。ねえ、遠く離れたどっかの惑星がさ、戦争とか環境破壊とか天変地異とか、何かそういうもので終末を迎えているの……で、この人はさ、その星の最高司令部とか国連みたいなものの命令を受けて地球にやって来た訳よ、使命感に燃えてね。でも、途中で事故に遭って氷川様に墜落しちゃったの、それであたしに助けを求めて来たのよ。そういう事って考えられるでしょう。

A （首を傾げ）いやー。

B 考えられない。

A （左右の指を立てながら）たぶん、考えられるヤツと考えられないヤツが……。

B じゃ、京子さんは考えられないヤツだって言いたいなの？

A ちよっと根本的などころから考えない。

B 何、根本的って。

A わたしね、どうも解らないのよ。そもそもそのところが……。

B 何が？

A あんたさ、銀杏の幹にへばりついてるこいつ見た時にさ、ナメクジたと思わなかったの？

B どうしてよ。

A どうしてって、こう言うの見た人わさ、百人中百人がナメクジだと思うでしょう。『あれ、宇宙人じゃないか？』って思って掌に乗せて持っ

て帰って来て、小鉢に入れちゃう人なんていないと思うよ。
助けを求められても？

A そもそも、そこが変じゃない。

Bits
11

B どこが変なのよ。

A 「助けを求められたと言う」そういう感じがただけでしょ。

B だから、「しただけ」じゃないの、今も続いているの。

A あんたさ、どうしてそういう感じが、こいつから出ていると思うの。

B だって、そんなんだもの、テレパシーってね、世界中で研究されてて、

実験なんかも行われてるのよ。前テレビで見たもん。

A そういうのを研究している連中居るかもしれないけど、テレビっての

はさ、そういうのを面白半分に取り上げるだけで、ああいうのって、

だいたい食わせ物なの！

B 食わせ物？

A そう、ショーなのよ、ミスターマリックと同じ。

B それどういう意味？

A ミスターマリックが本当にハンドパワー持ってるなんて思っていない

でしょう。

B (無言で、ジッとAを見つめる)

A ……思ってるわけ？ あんたあれ本当だって信じているの？

B どうしてよ。

A あれ手品だよ。ミスターマリックがやってる事はプロの手品師だった

ら誰でも出来るのよ。種があるんだから。

B ちよつと聞きたいんだけど。

A 何よ。

B 京子さんはあたしが宇宙人を助けた事を、「食わせ物」だと言いたい

訳？

Bits
12

A いやいや、食わせ物だと言ったのはテレビの話しでさ、テレビでやっ

ている、何とか言う「特番」の話しよ。

B だって、同じ事でしょう、仕掛けがあつて誰かがあたしを引っかけよ

うとしてるって言いたいんでしょ…：…：そんなのおかしいでしょう。

いい、誰が何のためにあたしを引っかきなさいけないの？ あたしに

ね、ナメクジを宇宙人だと思わせて誰が得するの？ そんなことする

人居る訳ないでしょう。

A 違う、そういう事じゃないのよ。

B 違わないのよ。だってさ、テレビが食わせ物だとか、マリツクがどうとか、何でそういう話になるのよ。素直に言えばいいじゃないよ。わたしは宇宙人何か信じたくないって、宇宙人は存在しないって思いたい訳でしょう。

A ちよつと待ってよ。あのさ、テレビとはマリツクが出て来たのは美穂ちゃんと言いだめたからでしょう！ 行きがかり上そう言う話になったって言うだけで、わたしは宇宙人が居ないとかそういう話をしてんじゃないわよ！

B じゃ、存在すると思ってるってこと。

A それとこれとは話の次元が違うだろ。

B だって……。

A (怒る) 今、あなたのナメクジの話してるんでしようが！

B (怒る) 全然次元が違う話だと思わないもん。だってお前が頭っから

A (怒る) 今、何て言った!!

B (怒る) 『お前が』って言ったんだよ。

A (怒る) それで？

B (怒る) お前が宇宙人の存在を認めてないんだとしたら、あたしがいくら説明したって無駄でしょう！ 嫌なの、あたしそうやって人から決めつけられるのが、気分悪くなるだけだし、正しいのは自分だけなんです！ あたしの言う事なんか、どうせ食わせ物のテレビから仕入れたことばっかりだと思ってるんでしよう。

A (がっくり) ……わたしそんなこと、一言も言っていないでしょう……どうしたのよ。

B ……(怒っている) そうめん食べる。

A はあッ！

おわり

2019/04/01mon

令和元年